

美化語「あげる」の軌跡

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1997-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 斎賀, 秀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1449

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



美化語「あげる」の軌跡

齋 賀 秀 夫

1 「あげる」は謙讓語か、美化語か

1 独り歩きした有森選手の「自分をほめてあげたい」

アトランタ五輪の女子マラソンで銅メダルを獲得した有森裕子選手がゴール直後に「自分をほめてあげたい」とコメントしたことが、五輪後相次いで報道された。以下はその一例である。

- ① メダルの色は銅かもしれないけれど、終わってから“何でもっと頑張れなかったか”という気持ちにはなりたくなかった。初めて自分を褒めてあげたいと思っています。(サンケイスポーツ、平成8年7月29日)
- ② 「自分をほめてあげたい」(日本経済新聞、7月29日朝刊35面のトップ見出し)。なお、本文記事中にも、「メダルの色は銅だけど、初めて自分で自分を褒めてあげたい」と書いている。
- ③ 「自分で自分をほめてあげたい」と言った有森選手が……(8月8日、NHK衛星第一放送、五輪閉会式実況中継・森中直樹アナ)
- ④ 「自分をほめてあげたい」(毎日新聞・Weekly くりくり)の見出し、8月25日)

「あげる」は、本来、下位の者が上位の者に何かを渡す言い方で、敬語の種類で言えば「謙讓語」に属する。従って、他人に対して自分のことを話すとき「あげる」を使うのは、自分自身を高めて待遇する結果になるから適切な表現とは言えない。それを言うなら、例えば、

- ・それにしてもよく打ったよ。自分をほめてやりたい。(報知新聞、平成8年8月7日、中日ドラゴンズ・大豊選手が逆転2ランを放った試合後のコメント)

のように、「ほめてや^りたい」と言うほうが自然である。もし「ほめてあ^げたい」を是認するとすれば、この「あげる」は、もはや謙譲語としての意味が薄れ、上品に物を言うための「美化語」(注1)に変化したものと解釈するしかない。

ところが、前述の有森選手の「ほめてあげたい」は、マスコミ界の独り歩きであったことが判明した。他紙の7月29日朝刊を調べてみると、朝日・毎日・読売の3紙は、見出しでも本文記事でも「自分をほ^めたい」と報道している。更に、決定的な事実とは、テレビのニュース特集などによって有森選手のゴール直後のインタビューの映像を追跡してみると、その場面での本人のコメントは、「初めて、自分で自分をほ^めたいと思いました」であることが確認されたのである。(注2)

つまり、有森選手本人が「ほめたい」と語ったのにかかわらず、新聞記者やアナウンサーが、勝手に「ほめてあ^げたい」と変身させたというわけである。この事実は何を意味するか。美化語としての「あげる」の用法が、マスコミ界の一部にかなり深く浸潤しており、それが「自分をほめてあ^げたい」という独り歩きの報道になつたものと解釈できる。

2 投稿に見る「あげる／やる」の論議

「あげる」を使うか、「やる」を使うかという論議は、一体いつごろからなされているのだろうか。月刊雑誌『言語生活』(筑摩書房刊)のコラム、「目」「耳」「ことばのくずかご」などの記載によって年代順に追跡してみよう。『言語生活』は、1951(昭和26)年10月、言葉の月刊誌として創刊され、1988(昭和63年)年3月、通巻436号で休刊となるまで、足掛け38年続き、その編集は国立国語研究所の研究員が交代で当たった。「目」の欄は書き言葉を、「耳」の欄は話し言葉を取り扱ったもので、ちまたで見聞する誤った言葉遣いや、注目される新しい表現、ユーモラスな言い回しなどを取り上げて言及するコーナーであり、同誌の人気コラムの一つであった。初期のころは、担当者(国立国語研究所員)が気づいた言葉遣いを取り上げていたが、1960年代になると、読者からの投稿が増えてきてそれを中心に据えることが多くなった。従って、今日から見れば、それらの記事が歴史的な言語事実あるいは言語感覚の証言者とし

ての意味合いを持つものと考えられる。(注3)

また、「ことばのくずかご」は、同誌の1966(昭和41)年4月号から始まったコラムで、現代語用例採集の第一人者として知られる見坊豪紀(故人)が担当した。これは、新聞、雑誌等一般の刊行物から用例を採集したもので、前記の「目」「耳」と同様の資料的価値を持つ。なお、このコラムは後に再編集されて単行本4冊にまとめられている。(注4)

① [1952(昭和27)年2月号「目」]

「餌をあげないでください」これは動物園の立札。池には鵜が泳いでいる。動物愛護じゃなくて動物尊重？ だが「さしあげる」とはちがうんだね。

② [1958(昭和33)年9月号「耳」]

「あんまり消化のいいものばかりあげていたもんですから。」発言者は、たいへん可愛らしいお母さんでありました。(小児科医院で)

動物やわが子について「あげる」を使った例が、すでに1950年代から指摘されていたことは注目してよい。

③ [1970(昭和45)年6月号「目」]

抵抗はないか？

「暮しの手帖」最近号の「家事のヒント集」の中に「こどもの服の丈をのばしてやりましょう」という一項があり、そのほかにも「こどもの運動服が……よくみてやりましょう」とあった。近頃、ヤタラと「あげましょう」づいていっているさなかに、この「やりましょう」は天の一角に青空を仰いだ気持だった。(堺市 市村健一さん)

この投稿は、昭和40年代の半ばに美化語の「あげる」がかなり広く使われていた事実を証言するものと言えよう。

④ [「文研月報」1975(昭和50)年10月号所収「アナウンサーと敬語」稲垣文男ほか。「ことばのくずかご」]

〔NHK総合〕テレビ「奥さんごいっしょに」(昭50年5月1日放送)でも、世代間の対立をくっきり浮き出してみせた例だが、若い母親は「うちの子にミルクをあげる」と平気でいう。「あげる」はすでに「やる」のていね

い語として意識されている、「やる」というと下品に響く、と反発する。

ここでは、当時すでに「やる」は下品な言葉だと意識する若い母親たちが存在することを指摘している。

- ⑤ 「『婦人公論』1975年10月号、「してあげる」石森史郎。「ことばのくずかご」]

私は、現在、NHKでテレビ小説「水色の時」の脚本を書いておりますが、放送当初、母親が子供に“してあげる”という言葉を使ったのですが、抗議の投書と電話がうるさい程まいました。私の父や母がモデルになっています。厳しい父や母ではありましたが、私たち子供に、押しつけがましく“してやる”という言葉は使いませんでした。

親が子に対して「してあげる」というのは、現在では、親愛語としてある程度定着していると考えられるが（15ページ）、当時はそれに対して抗議する意見が多かったという事実と、また、筆者が親が子に対して「してやる」というのは“押しつけがましい”言い方だと意識している点とが注意される。

なお、ここで上記の④⑤と同年代のものとして、大石初太郎著『現代敬語研究』（昭和58年4月、筑摩書房刊）の中に引用されている、1975（昭和50）年4月ごろの朝日新聞「(03) 212—0023」欄に出た四人の投書を、⑥～⑨として挿入する。

- ⑥ 九州に育ったわたしは「あげる」は、一種の敬語で、他人に自分の親族のことを話すときや動植物には「やる」ということばを使うように教えられてきました。東京に来て、よその奥さんが自分の子どものことを話すとき「あげる」という人がいて、奇異に感じていました。

＝東京都練馬区の主婦（二九）

- ⑦ わたしは「やる」は男性語、「あげる」は女性語と理解しています。日本橋に生まれましたが、母親からそのようにしつけられました。通っていた常盤小学校でもそのように教わりました。わたしの周辺の同年配の人は、同じ語法です。

＝東京都練馬区の主婦（五二）

- ⑧ わたしのばあいの「あげる」は、敬語法とかなんとか深いことを考えたものではなく、ただ、やさしい言葉として使っているだけです。

＝東京都世田谷区の主婦（四二）

- ⑨ 「あげる」を一種の尊敬語とするからむずかしいことになると思います。いっそ親愛語と見れば、抵抗はなくなるはずです。尊敬語なら「さしあげる」があります。動植物に「あげる」を使うのも、生きものを人間と同じものと見る東洋的思想が感じられていいじゃないですか。石や鉄には使いませんからね。

＝埼玉県越谷市の大学生（二三）

以上の投書に対して、大石は、次のように述べている。（原文の④を、ここでは⑨に、原文の①を⑥に改めた。）

⑨の意見に対しては、なるほどそういう考え方もあるのかと、ちょっと感心させられたが、筆者の意識は⑥の意見に準ずる。

この美化語の「あげる」に対する論議はその後も続いて、現在に至っている。

- ⑩ [1982（昭和57）年1月号「耳」]

十月二十二日、教育テレビ「植物で作る」で女性アナウンサーが「30度を越すとアルコール発酵タンクを冷やしてあげる」。「あげる」は、我が子→動物→植物を經由して、ついに機械・器具にまで及んできました。（長野県佐久市 出沢万紀人さん）

この発言は、アナウンサーの一種の言い損ないとも見られるが、美化語の「あげる」が機械や器具にまで及んだ実例は、現在ではさほど珍しくはない（18ページ）。しかし、15年前にすでにあったという報告は注意しておきたい。

- ⑪ [1991（平成3）年、朝日新聞9月22日朝刊]

最近の若い人は「犬にえさをあげる」、「花に水をあげる」、テレビの料理番組の先生までが、「野菜を刻んであげる」、「いためてあげる」などと言います。言葉遣いにやかましい時代に育った私は、どうしてもそういう言葉が使えません。かと言って、日常会話で、「犬にえさを与える」「花に水を注ぐ」と言い換えるのも変ですし、悩んでいます。言葉も時代によって変わると言いますが、こんなおかしい変わり方はテレビの影響としか思えません。今の時代に生きる以上、こんな言葉を使わなければならないのでしょうか。（兵庫県宝塚市・悩む私・65歳）

⑫ [1995 (平成7) 年、朝日新聞 5月4日朝刊]

好きになれぬやる ことばてれば(4月23日、NHK)で動物や植物にえさや水は「やる」のか「あげる」のかが話題になっていました。正しくは「やる」なのでしょうが、子育てをしていると、動植物も一緒に生きている仲間として擬人化して話すので、「あげる」が当たり前になっています。人間からの一方的な「やる」は、生き物にランクをつくっているようで、あまり好きになれません。(秦野市・斎藤由佳里・主婦・33歳)

⑪と⑫は比較的近年のものであるが、⑪は前掲の⑥と同じ考え方であり、⑫は、同じく⑧や⑨の意見に通じるものである。ここで一つ注目したいのは、「あげる」否定論は、地方出身および地方在住者であり、「あげる」容認論は東京都および首都圏在住者であることである。このことは単なる偶然の結果かもしれないが、次章以降の分析にもかかわることなので、一言触れておきたい。

以上、新聞や雑誌などに掲載された「あげる／やる」に関する論議を年代順に追ってみたが、これだけでも、太平洋戦争終了以降に美化語の「あげる」の用法が次第に勢力を増していったことが裏付けられるだろう。

Ⅱ 文化庁・世論調査の結果の分析

「国語に関する世論調査」の概要

この「あげる」を使うか、「やる」を使うかに関して、現代の日本人全体の意識はどうなっているのだろうか。それをうかがうのに好都合な一つの調査結果がある。文化庁が1995 (平成7) 年夏に公表した『国語に関する世論調査』(大蔵省印刷局刊) がそれである。この調査の目的および調査項目の詳細については同報告書に譲り、調査の概要を記すと次のとおりである。

〔調査対象〕 (1) 母集団：全国16歳以上の男女個人。 (2) 標本数：3000人
(3) 抽出方法：層化2段無作為抽出法

〔調査時期〕 平成7年4月6日～17日

〔調査方法〕 調査員による面接聴取法

〔回収結果〕 有効回収数：2212人 (73.7%)

以上のとおり、厳密な調査方法がとられていること、また有効回収数も7割を超えていることなどから見て、現在のところ信頼できる唯一の調査結果であると言ってよい。

さて、この調査項目の「Q10」に、「あげる／やる」に関する次の三つの質問が含まれている。

- (1) 植木に水をやる／植木に水をあげる
- (2) うちの子におもちゃを買ってやりたい／うちの子におもちゃを買ってあげたい
- (3) 相手チームにはもう一点もやれない／相手チームにはもう一点もあげられない

この3問について「それぞれに挙げた二つの言い方のうち、あなたがふつう使うものはどちらですか」という質問形式を用いている。この3問の集計結果は、後掲のグラフ(11ページ下欄)のとおりであるが、以下、各問ごとに細かく検討していくことにする。

(1) 「植木に水をやる／あげる」の場合

報告書に記述された分析結果は、ほぼ次の通りである。

〔全国平均〕 「やる」が75.3%と全体の4分の3を占め、「あげる」は20.2%である。

〔地域ブロック別〕 「やる」は九州の84.9%を筆頭に北陸、東北、中部の4地域で8割を超える。一方、関東では「やる」は65.8%と7割を下回り、「あげる」が29.9%と3割を占める。

〔性別〕 「やる」は男性の方が割合が高く、男女差は15ポイントである。一方、「あげる」は女性が男性の2倍見られる。

〔性・年齢別〕 「やる」は男性の高年層で高く、男性の50代以上では9割を占める。一方、「あげる」は女性の若年層で高く、女性の20代以下では4割以上となっている。

なお、この報告書には、末尾に「集計表」が載っており、そこには、地域ブロック、都市規模、性、年齢、性・年齢、職業ごとに分けた内訳の数字(%)

が示されている。それらを細かく検討すると、更にいろいろな事実が明らかになってくる。例えば都市規模別の内訳を見ると、下表のようになっている。

	やる	あげる
大都市	68.5	28.2
東京都区部	57.7	39.2
政令指定都市	72.9	23.7
中都市（人口10万以上）	73.7	21.2
小都市（人口10万未満）	79.4	18.0
町村	80.6	13.4

この結果を見ると、都市規模の縮小に伴って「やる」の割合が高くなっていることが分かるが、更に注意すべきは東京都区部の数値である。前述の報告書の地域ブロック別の分析では、関東では「やる」が7割を下回るとしているが、東京都区部だけでは、57.7%と6割を下回り、「あげる」が39.2%と4割近くを占めることが分かる。

また、性・年齢別では、女性の20代以下では4割以上が「あげる」を使うと分析しているが、「集計表」中の数字の一部を示すと右のようになる。つまり、女性の20～29歳という年齢層が他の年齢層より際立って「あげる」を使うことが知られる。

(女性)	やる	あげる
16～19歳	54.0	41.3
20～29歳	50.0	47.3
30～39歳	62.9	32.3

更に、報告書の分析では全く触れていない職業別の数値にも興味深い結果が読み取れる。有職者の内訳の一部と無職者との百分比を下表に示す。

	やる	あげる
自営業主（小計）	88.7	9.4
農林漁業	95.9	1.4
商工サービス・自由業	85.9	12.5
無職（計）	70.3	24.7
主婦	65.3	28.5
学生	64.7	30.7
その他の無職	85.6	11.5

つまり、植木にかかわりの深い人たちを含む農林漁業層で「やる」が95.9%、「あげる」がわずか1.4%という結果は興味深い。また、主婦・学生層が全国

平均 (20.2%) を上回って「あげる」を使うことも、この結果から読み取れる。

(2) 「うちの子におもちゃを買ってやりたい／買ってあげたい」の場合

この結果については、報告書は次のように分析している。

〔全国平均〕 「やる」が58.5%、「あげる」が35.8%である。

〔地域ブロック別〕 「やる」は中国の70.9%が最も高く、一方、関東では「やる」は46.7%と半数を下回り、「あげる」の47.2%と並ぶ。

〔性別〕 「やる」は男性の方が割合が高く、男女差は13ポイントである。一方、「あげる」は女性の方が高い。

〔性・年齢別〕 「やる」は男性の高年層で高く、「あげる」は女性の若年層で高い。また、男性の20代と女性の30代以下では、「あげる」の方が「やる」より割合が高い。

まず注目されるのは、地域ブロック別の差が大きいことである。「集計表」の数字を右表に示す。一見して東日本と西日本との間で差があることに気づく。特に、「やる」は中国で70.9%に対し、関東は46.7%、「あげる」は、関東で47.2%に対し、中国では19.9%と、それぞれの最高値と最低値の差は、24.2ポイント、27.3ポイントと大きく開いている。

	やる	あげる
全 国	58.5	35.8
北海道	58.9	35.7
東 北	53.2	34.5
関 東	46.7	47.2
北 陸	65.1	32.1
中 部	62.7	33.9
近 畿	64.5	31.3
中 国	70.9	19.9
四 国	66.3	28.1
九 州	66.3	29.8

更に都市規模別の内訳を見ると、規模の縮小につれて男女共に「やる」を選ぶ傾向にあることは、質問項目(1)の場合と同様である。しかし、大都市の内訳を見ると、下表のようになっている、東京都区部では、「あげる」と「やる」で勢力の逆転することが分かる。

次に、性別の結果では、報告書の分析にもあるとおり、女性の方が「あげる」を選ぶ割合が高いが、それでも全

	やる	あげる
大都市……………	50.8	44.2
東京都区部……………	46.2	51.5
政令指定都市……………	52.7	42.0

国平均では、右表のようにまだ「やる」を選ぶ方が優位を占めている。しかし、性・年齢別の内訳を見ると（下表）、男性の20代と、女性の10代、

	やる	あげる
男性	65.7	29.3
女性	52.4	41.4

20代、30代では、「あげる」が「やる」を上回っていることが分かる。特に、16歳以上、20代までの女性の数値が突出している。

	男 性		女 性	
	やる	あげる	やる	あげる
16～19歳	48.5	45.6	25.4	71.4
20～29〃	37.2	55.8	27.0	66.2
30～39〃	54.0	38.0	44.8	50.4
40～49〃	68.2	28.1	58.9	36.4

更に、報告書の分析には現れない職業別の内訳を右表に抄記する。

ここで「あげる」を選んだのは、学生の62.1%という数値が突出していることに気付く。

	やる	あげる
有職（計）	61.1	33.7
無職（計）	54.4	39.4
主婦	53.9	38.5
学生	31.4	62.1
その他	72.2	24.9

以上要するに、自分の身内のことを話題にする場合、東京都区部の若い女性（特に、学生）は、圧倒的に美化語の「あげる」を選ぶ者が多いということが指摘できよう。

(3) 「相手チームにはもう一点もやれない／あげられない」の場合

報告書の分析は、次のとおりである。

〔全国平均〕 「やる」は79.5%を占め、「あげる」16.1%を大きく上回っている。

〔地域ブロック別〕 「やる」は九州で87.2%と最も高い。一方、四国では

「やる」は65.2%と7割を下回り、「あげる」が29.2%と高くなっている。

〔性別〕 「やる」は男性の方が割合が高く（87.6%）、男女差は15ポイントである。「あげる」は女性の方が高い（22.2%）。

〔性・年齢別〕 「やる」は男性のいずれの年代でも8割台である。一方、女性では最も高い16～19歳でも77.8%と8割を下回り、最も低い50代では67.9%と7割を下回っている。

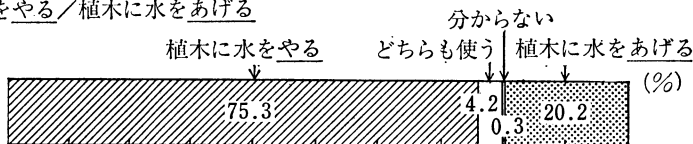
10 この項目では、前の(2)と違って、「やる」を選ぶ割合がかなり高い。これは、スポーツ（勝負）の世界のことであり、相手チームは敵と見なされるため、「やる」を使うことにも抵抗が少ないためであろう。

この項目については、「集計表」に掲げられた内訳の数字は省略する。

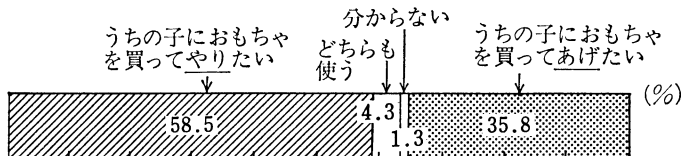
以上の項目(1)~(3)を総括してみよう。全国平均で見ると、(1)と(3)の項目では、「やる」の方が圧倒的に優勢であるが、(2)の項目では「やる」と「あげる」がかなり接近する。美化語としての「あげる」は、特に東京の若い女性の間にかかなり広まっていることが、数字の上で明らかになった。女性が「やる」を避けて「あげる」を選ぼうとする気持ちは自然であり、こうした傾向が東京を中心に次第に広がっていくことも予想される。しかし、文化庁世論調査の全国平均の数値が示すとおり、美化語の「あげる」に対して抵抗感を抱く層もかなりある。少なくとも(1)や(3)の項目に関しては、「あげる」よりも「やる」の方を標準的な言い方と考えてもよいであろう。

なお、以上の文化庁調査は、国民一般の「やる／あげる」に対する意識を全国的規模で調べた、現在では唯一の資料である。しかし、この調査では、話題についてはともかく、話し手・聞き手・場面などの条件設定は一切なされていない。例えば、(2)の調査項目など、話し手が男性か女性か、また、聞き手が身内の者

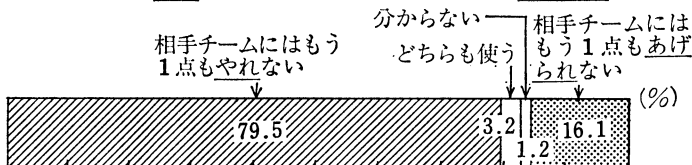
(1) 植木に水をやる／植木に水をあげる



(2) うちの子におもちゃを買ってやりたい／うちの子におもちゃを買ってあげたい



(3) 相手チームにはもう1点もやれない／相手チームにはもう1点もあげられない



が外部の者か、更に聞き手が自分にとって上位の者か下位の者かによって、言い方が変わってくる可能性も考えられる。従って、次のⅢでは、それらの条件を考慮しつつ、また、「やる」と「あげる」の歴史的変遷にも目を向けて分析を進めていこうと思う。

Ⅲ 話し手・聞き手・話題・場面などによる分析

1 山本道子のアンケート調査

以下の記述では、「山本調査」の結果を、随時引用しながら考察を進めていくことにする。「山本調査」とは、平成7年度に大妻女子大学文学部国文学科を卒業した山本道子(埼玉県出身)の卒業論文「〈あげる〉と〈やる〉に関する研究」(注5)中のアンケート調査の結果報告をさす。この調査は、話し手・聞き手・話題・場面などを細かく設定した質問項目を作成してアンケート調査を実施したものである。また、その結果も、性別、年齢別に分析するだけでなく、質問項目相互の相関値を出すなど、きめ細かな分析が施されている。ただし、本稿では紙幅の関係もあり、全体結果を中心に引用する。

調査時期は平成7年の7月～8月。回答者の人数および年齢層の内訳は、下表のとおりである。回答者の大半は、東京都及び首都圏(埼玉・千葉・神奈川)の在住者である。

また、山本調査とは別に、筆者が平成6年7月に実施した小調査の結果も、必要に応じて引

	10代	20代	30代	40代	50代	計
男性	40	37	28	6	3	114
女性	40	37	24	16	7	124
計	80	74	52	22	10	238

用する。この調査は、いわゆるパイロット・サーベイ(予備調査)であって、山梨県内の国語科教師(小・中・高)62名を対象とした小規模のものである。

なお、上記両調査とも、調査票では、

① [父親→子供] チョコレートをもらったから {あげる} よ。

12 のように、選択肢を並記して示したが、以下の引用では、便宜上、選択肢の部分を空欄にして()で示すことにする。また、結果として示す洋数字は、すべて、百分比(%)であるが、この場合も「%」という記号は省略する。

2 親愛表現の場合

話し手が下位の者に向かって直接物事を行う場合に、「あげる」を使うか、「やる」を使うかについて考察してみよう。まず、山本調査の質問項目と、その結果を引用する。

- ①〔父親→子供〕チョコレートをももらったから（ ）よ。
 ②〔男性教師→生徒〕分からない問題はいつでも教えて（ ）から持ってきて下さい。

①の結果

	あげる	やる
全体	49.6	50.4
男性	43.4	56.6
女性	55.3	44.7

②の結果

	あげる	やる
全体	60.1	39.9
男性	64.0	36.0
女性	56.5	43.5

①の全体結果は「あげる」と「やる」が半々であるが、回答者の性別内訳を見ると、男性は「やる」を選ぶ方が多く、女性は「あげる」を多く選んでいる。4ページの投書⑦に見られるように「やる」は男性語、「あげる」は女性語と意識する向きがあることに通じるものである。

また、投書⑤にあるように「してやる」は押し付けがましいと考えるところから「あげる」を選ぶ男性もかなり存在すると思われ、それが②の結果に反映していると思われる。

筆者の予備調査では、文部省唱歌「桃太郎」(注6)の一節「やりましょうやりましょう、これから鬼の征伐について行くならやりましょう」の下線箇所を選択肢として質問したところ、「あげる」が65.1%、「やる」が34.9%という結果を得た。これらの「あげる」は自己の品位を保つための「美化語」というよりも、相手に対して親愛の情を表す「親愛語」とよぶ方が適切であろう。

ところで、この親愛語としての「あげる」の用法は、いつごろから現れるのだろうか。江戸時代の作品に現れる「あげる」は、ほとんどが謙譲語と見られるが、『浮世風呂』(1810<文化6>)に次の用例がある。(注7)

・^{てつ}鉄さんや、^{こりよ}是を、おまへに^{あげ}上やう。(前編下)

これは同年輩の子供(男)同士の会話であり、ト書きに「此子は子どもの内でもおとなしい子なり▲おとなしき子には友だちのわんぱくものも、おのづからことばがあらたまるなり」という注釈が付いている。

また、「七八才をかしらにして、六歳ばかりなる娘の子、四五人」が女湯の脱衣場でままごと遊びをしながら口論する場面では、

・はる「そんなら、今しがた^{あげ}上た物をお返し」にく「アム返すよ。こんな穢^{きたな}いものは入らないよ」(中略)はる「よいのさ。今度^{こんどつ}から何を呉^{くれ}ろとお云でも、やりやアしねへからいム」(二編上)

という会話が交わされる。どちらも子供の言葉であるが、この「上る」も、下点部の「やる」と対比すれば親愛語の萌芽と見ることができよう。

1871~72(明治4~5)年刊の『安愚楽鍋』には、親愛語、美化語の「あげる」は全く現れず、「やる」が普通に使われている。1885~86(明治18~19)年の『当世書生気質』(注8)も、全体としては「やる」の方が優勢であるが、まれに次のような用例が見える。主人公の権妻であるお常が道で出会った孤児のお芳(十歳)に同情して語りかける場面である。

・^{わたし}妾が出来るだけ力になって^{あげる}あげるから。ヨ。ヨ。心配おしでない。(第四回)

・^{だんな}檀那さまにお願い申して。妾の手元に置いて。世話を^{あげ}して上るから。ヨ。ヨ。安心しておいでよ。(同上)

・^{そなた}其方ハわたしの^{いと}妹にして。これから世話を^{あげ}してあげやう。(同上)

これらは明らかに親愛語としての用法である。

明治末期から大正時代になると、夏目漱石、森鷗外、志賀直哉などの作品に次のように親愛語の「あげる」が現れる。

・どうでもして^{上げる}上げる事が出来るんだけども<お米→義弟>(門、1910<明治43>年)

・お前を麓へ送って^{上げ}よう<安寿→厨子王>(山椒大夫、1915<大正4>年)

- ・お前には何か御馳走してあげたいから其辺まで一緒においで<店の客→店の小僧>(小僧の神様、1920<大正9>年)

以上のような経過で、「あげる」の親愛語としての用法が一般化し、今日ではすっかり定着してしまったと考えられる。その背景としては、面と向かって「やる」を使うと、相手を見下げる感じ、あるいは押しつけがましい感じ(4ページ⑤)が伴うため、避けられるようになったものと思われる。

3 動植物の場合

文化庁の世論調査にもあった「植木に水をやる」か「水をあげる」かという問題である。山本調査では、この問題に関する質問が5項目用意されているが、ここではその一部を引用する。

- ① [母親→子供] チューリップに水を()てくれる?
(あげる39.1/やる60.9)
- ② [子供→母親] 金魚にエサを()てもいい?
(あげる57.1/やる42.9)
- ③ [農家の人→その仲間] うちの明日、キャベツに肥料を()うと思ってるんだ。
(あげる10.5/やる89.5)

回答者の性別、年齢層別の内訳については省略する。大体の傾向は、文化庁世論調査の結果と変わらないからである。以上の全体結果からだけでも、次のことが分かる。

- (1) 文化庁の「植木に水を～」の全国平均は、「あげる20.2/やる75.3」という結果だったが、それに比べると、山本調査では「あげる」の支持率が総体に高い。このことから首都圏在住者が特に「あげる」を好んで使う傾向がうかがわれる。ちなみに、筆者の予備調査「[母親→子供] お庭のチューリップに水を()てちょうだい」では、「あげる30.2/やる69.8」という結果だった。山梨県では、首都圏ほどには「あげる」を支持していないようである。
- (2) ①(チューリップ)に比べると、②(金魚)の方が「あげる」を選ぶ率が高い。これは、近年のペットブームとも関係がありそうである。

(3) 同じ植物でも、①の観賞用のチューリップと②の栽培用・食料としてのキャベツとでは、全く異なる結果になった。

以上は、アンケート調査の結果であるが、最近では、新聞や広報紙の記事にも、時折、次のような表現が現れる。

- ・劇場の楽屋に出没する大ネズミに毎日ご飯をあげてならしたり（読売新聞、平成8年11月24日朝刊23面）
- ・帰り際に、虫かごから虫を逃がしてあげる子どもたちもいました。（市町村広報紙）(注9)

前者は、某女優にインタビューしてまとめた記事、後者は「学園だより」として市内の小学校の教師が書いた文章である。動植物に対して「あげる」を使う傾向が年々増えてくる実情にあるが、筆者の意識としては、これらは美化語というより、敬語の誤用と考えたい。

4 自分の身内の者を話題にする場合

文化庁世論調査の(2)「うちの子におもちゃを買ってやりたい／買ってあげたい」に該当する場合であるが、これも条件によっていろいろなケースが出てくる。まず、山本調査の結果を引用する。

①〔高校生→友人〕母の日にカーネーションを（ ）たら、すごく喜んでた。
(あげる81.1／やる18.9)

「あげる」は性別で多少の差はあるが（男性71.9、女性89.5）、全体的に支持されている。この場合の「あげる」は謙譲語とは考えにくい。母はもちろん身内ではあるが、目下から目上への行為を「やる」と表現するのは粗暴な感じが伴うので、この言い方は普通に行われている。美化語と認めてよいケースだと思いが、次の場合はどうだろうか。

②〔母親→その友人〕うちはまだこづかい（A）てないんだけど、おたくはいくら（B）てるの？

A（あげる52.7、やる47.3）

B（あげる85.7、やる14.3）

AとBとで結果に大差が見られるが、Bは話し相手の行為だから乱暴な感じ

の「やる」が避けられるのであろう。しかし、筆者の言語感覚では、相手がごく親しい友人なら、A、B共に「やる」でよいと思われる。また、多少遠慮すべき相手なら、「A=やる、B=おやりになってるの（おやりなの）」と言いたいところである。しかし、現代の若い人たちにとっては、「おやりになる」という尊敬語法は使いづらいかもかもしれない。

山本調査ではもう一つ、双方への敬意を考慮しなければならない設問がある。

- ③〔私→父親〕今まで花子<私の妹>に何もして(A)てないから、就職のお祝いにこのお金(B)てくれる？

A (あげる43.9、やる56.1)

B (あげる77.6、やる22.4)

Bは父親の行為だから、やはり「やる」を避ける人が多かったのだろうが、筆者の意識では「やる」でいいところだと思う。もっとも「渡してくださる？」という言い方なら父に対しても敬意を表せる。ともかく、②③のBの「あげる」が、謙讓語から美化語に移っていく過程にあるものとして、この「あげる」の位置づけには迷うところである。

- ④〔父親→母親〕太郎をおふろに入れて()から連れておいで。

(あげる27.0/やる73.0)

- ⑤〔父親→同僚〕来週の日曜日、子供を遊園地に連れて行って()うと思っているんだ。

(あげる15.5/やる84.5)

この2問の結果は、一般にまだ「あげる」に謙讓語の意識が強く残っていることをうかがわせて、筆者にとっては心強い。

ところが、最近では新聞や広報紙などでも「あげる」の使い方の混乱が見られる。

- ・そのくせ<両親が>大学生の弟には車を買ってあげたり、ガソリン代まで出してやっているのです。<東京R子>(読売新聞、平成8年12月4日朝刊17面。読者の投稿から)
- ・確かに平塚の公園だったら、1日遊ばせてあげられますね、(中略)たまの休日に子供をどこかに連れてってやろうと思うと、市内では連れていく

場所がないということに気づきますね。(市町村広報紙。座談会出席者の発言から)

なお、身内の者に準じるものとして、自分の教え子について他人に語る場合にも、「あげる」を使う人が増えてきている。

・生徒らは、無限の可能性を秘めています。そうだとしたら、そのチャンスを与えてあげるのは教師の役目だと思っています。(市町村広報紙)
などがそれである。紙幅の関係で山本調査の結果は省略するが、このケースでは、自分の身内の者の場合よりも「あげる」の使用度が高くなるようである。

5 その他の場合

自分の子や教え子ではなく、一般的に子供のことを話題にする際にも「あげる」がよく使われる。例えば、次の例がそれだ。

・わたしたち大人も子供たちになにをしてあげればいいのか、いっしょに考えてみたいものです。(市町村広報紙)

筆者が平成8年12月に目を通した神奈川県36市町村の広報紙の中に、この種の用法が十数例も見つかった。山本調査では、次の結果が報告されている。

・〔新聞投書〕多くの母親が子供に対し、できるだけ安全な食べ物を選んで()たいと思うものです。(あげる54.2/やる45.8)

この結果の内訳を見ると、「あげる」は、男性67.5に対し、女性41.9と、男性の方が支持率はるかに高く、また、各年代別に見ても同じ傾向を示すという不思議な結果が出ている。この「あげる」を美化語と見るか否かは、人によって判断の分かれるところかもしれない。筆者の意識では、もちろん「やる」を支持する。

最後に、5ページの投書⑩で指摘された、機械・器具にまで「あげる」を使う場合に触れておこう。山本調査には、この項目は含まれないが、筆者の予備調査では、次の文について質問した。

18 ・〔クーラーの手入れについての電力会社のテレビCM〕天気の良い日に窓を開けて、クーラーのスイッチを入れ、クーラーにたまったチリやホコリを取って()てください。(あげる27.9/やる72.1)

この文はテレビで連続放映された実例であり、そこでは「あげる」を使っていた。当時（3年前）は奇異に感じたが、最近では似た例をよく見聞きする。

- ・整理体操 できれば柔らかい床の上で、使った部位の筋肉を時間をかけて伸ばしてあげましょう。(市町村広報紙)
- ・肝臓が望むものを与えてあげることです。……肝臓が休む日を作ってあげることです。(平成9年1月7日放送、NHK総合テレビ「生活すぽっと」)

前者は、広報紙に神奈川県の医者が執筆した文章、後者は東京都内の某総合病院副院長がテレビに出演して語ったものである。ついに筋肉や内臓に対してまで「あげる」を使う人が現れたかと慨嘆した次第である。もちろん、これらの場合は、「あげる」や「やる」を使わなくても、「チリやホコリを取ってください／肝臓が望むものを与えることです／休む日を作ることです」と言えば十分なところである。冒頭に掲げた有森選手の「自分をほめたい」というコメントを「ほめてあげたい」と報道したのも、この種の“誤用”と考えられる。

6 残された課題

「やる」から「あげる」へ移行する背景について略述する。「あげる」は、江戸末期から明治中期ごろまでは謙譲語としての意味が明確だった。ところが、「あげる」よりも敬意の高い謙譲語としての「さしあげる」がこのころから出現する。

- ・あなた方ははじめてのおきやくゆへ、それで祝つて、ひとつさし^{あげ}上^ますのでござりますから、別に御酒代を、いただくのではござりませぬ。おこゝろおきなく、めしあがつて下さりませ。(東海道中膝栗毛・初編。はたごやの亭主→弥治郎兵衛・喜多八)(注10)

この「さしあげる」が、近代以降に多用されるに伴い、「あげる」の謙譲語としての意味が薄れていくのと並行して、美化語的色彩の強い用法が、特に女性を中心に発生したものと考えられる。

一方、古くから「つかわす」の意を本義とした「やる」が、近世以降「ある動作や行為をする」意を持つようになった。「する」よりも俗な言い方だとされてはいたが、最初は乱暴な言葉だという意識はなかったものと思われる。

ところが

- ・ぶつちめてやろふと思って、打くらつたげんきで（東海道中膝栗毛・初編）
- ・おざしきのたんびにばちのさいじりでコツコツやられたりも、をそつとつねられたり、いちめていちめていちめぬかれたかハりにやあ（安愚楽鍋・二編下）(注11)

のように、相手に不利益を供与したり、自分が被害を受けたりする場合によく使われるようになる。山本道子の卒業論文では、近代の文学作品の用例を調査したうえで、この「不利益の供与」と、「身分の上下関係への連想」の二つの理由によって「やる」が避けられるようになったと結論付けている。確かに首肯できる考察であるが、この点については近世以降の作品について更に精査し、推論を補強する必要があると思う。

▼近所の食料品店の若奥さん、奥から特別上等の品を出してきて、「あんたにやろうと思って取っておいたのよ。」「そうありがとう」とは言ったものの、ほしくなくなりました。（東京都杉並区 野崎多喜恵さん）

という『言語生活』の「目」（昭和42年7月号）にあるように、面と向かって「やろう」と言われたら、確かに見下げられた気持ちになるだろう。しかし、筆者はこの若奥さんはもしかすると地方出身者ではないかと思う。東京と違って地方では「やる」にそれほどマイナスのイメージは強くないのではないかと想像する。この点についても今後の調査が必要になろう。

以上、本来謙譲語であった「あげる」が、近年、美化語的に使われるようになった軌跡を追ってきた。「チョコレートをあげるよ」という親愛表現や、友人に向かって「母にカーネーションをあげた」と言う場合などは、謙譲語としての意味は全く失われているので、美化語と認定しても異論はあるまい。しかし、文化庁の世論調査や山本調査で取り上げたほかのケースを見ると、「あげる」よりもむしろ「やる」の方が適切と思われるものが多かった。これは、「あげる」に今なお謙譲語の意識が残っていることを表しているものと考えたい。ただし、それは筆者のような高齢者の言語意識にすぎないと、一言でしりぞけ

られるかもしれないが。

- (注1) 「美化語」というのは、辻村敏樹が素材を美化する言葉として名付けたもの。以後、大石初太郎、宮地裕などこの名称を踏襲する向きが多い。ただし、その概念規定は、各人とも必ずしも一致してはいない。
- (注2) 平成8年末、『現代用語の基礎知識』（自由国民社）が選定した「96年流行語大賞」にも、「自分で自分をほめたい」という言葉が受賞の対象になった。
- (注3) 『言語生活』の「目」「耳」はそれぞれ次の単行本となって刊行されている。
- ・『言語生活の〈目〉』1989（昭和64）年（筑摩書房）
 - ・『言語生活の〈耳〉』1989（昭和64）年（筑摩書房）
- (注4) 次の四冊である。（いずれも筑摩書房刊）
- ・『ことばのくずかご』1979（昭和54）年。
 - ・『〈60年代〉ことばのくずかご』1983（昭和58）年。
 - ・『新ことばのくずかご』1987（昭和62）年。
 - ・『88年版ことばのくずかご』1988（昭和63）年。
- (注5) 山本道子の卒業論文は、400字詰原稿用紙に換算すると200枚になんなんとする大冊である。全体は大きく二部に分かれ、前半は、アンケート調査の結果分析、後半は「あげる」と「やる」の語史について考察したものである。その語史の部分は、上代以降近代までの既刊の用語索引類から「あげる／やる」の全用例について吟味したうえでの立論である。内容的には問題の箇所もあるが、学部学生の卒業論文としては、まれに見る労作である。
- (注6) 尋常小学唱歌(一)に所収。明治44年5月作。引用は、岩波文庫『日本唱歌集』による。
- (注7) 『浮世風呂』の引例は、日本古典文学大系本（岩波書店）による。
- (注8) 『当世書生気質』の引例は、明治文学全集『坪内逍遙集』（筑摩書房）による。
- (注9) 以下「市町村広報紙」としたのは、平成8年度・神奈川県広報コンクールで審査員として目を通した、県下36市町村の広報紙から引例したもの。諸般の事情により、市町村名は伏せる。
- (注10) 『東海道中膝栗毛』の引例は、日本古典文学大系本による。
- (注11) 『安愚楽鍋』の引例は、『牛店雑談 安愚楽鍋 用語索引』による。